

【Ⅲ】フォーラム

<会場 1> 1号館 3F 1307 教室		
12:25	日本語学習・日本語教育の商品化と消費という視点から教室・学習者・教師を問い直す つながろうねっと（発表参加者：佐野香織、瀬尾悠希子、橋本拓郎、米本和弘；発表応募者：瀬尾匡輝）	p.79
-		
14:10		
<会場 2> 1号館 3F 1308 教室		
12:25	「ライフ」を聴いてどうするのか—言語文化研究におけるインタビューの意味— 福村真紀子（早稲田大学大学院日本語教育研究科(院生)） 遠藤ゆう子（早稲田大学日本語教育研究センター） 佐藤貴仁（早稲田大学日本語教育研究センター） 佐藤正則（早稲田大学日本語教育研究センター） 鄭京姫（早稲田大学日本語教育研究センター） ロマン・バシュカ（早稲田大学大学院日本語教育研究科）	p.81
-		
14:10		
<会場 3> 1号館 3F 1312 教室		
12:25	日本語教育の「教育」を考える—日本語教育における教育言説を手がかりに— 古屋憲章（早稲田大学日本語教育研究センター） 高橋聡（早稲田大学日本語教育研究センター） 松井孝浩（国際交流基金）	p.83
-		
14:10		

【フォーラム】

日本語学習・日本語教育の商品化と消費という視点から 教室・学習者・教師を問い直す

つながろうねっと（発表応募者：瀬尾匡輝，

発表参加者：佐野香織，瀬尾悠希子，橋本拓郎，米本和弘）

概要

近年、各教育機関が日本語・日本語学習の魅力を高め「商品化」に努めたり、学習者が商品として「消費」する傾向が強まっている。このような日本語学習・教育の商品化と消費は、学習者の声が教育内容に反映されやすくなり（Kelly & Jones, 2004）、学習者を主体とした新しい形の学びの場や方法、価値観が創出される可能性を秘めている。だが、一方で競争の激化、格差の拡大、職場環境の悪化（佐々木, 2009）や人種にまつわるイメージの再生産、文化の本質化への加担（Kubota, 2011）、留学に対する幻想の強化や性的側面が強調された教材の増加（Piller et al., 2010）などの問題も孕んでいることが様々な教育現場や他言語の学習において指摘されている。そこで本フォーラムでは、日本語学習・教育の商品化と消費という視点から年次大会のテーマである学習者・教師・教育機関の関係やそれぞれの役割について問い直す¹。

キーワード

商品化, 消費, 学習者, 教師, 教育機関

文献

佐々木賢 (2009). 『商品化された教育—先生も生徒も困っている—』 青土社

Kelly, M., & Jones, D. (2003). *A new landscape for languages*. London: Nuffield Foundation.

Kubota, R. (2011). Learning a foreign language as leisure and consumption. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 14, 473-488.

¹ 本フォーラムは、つながろうねっとの勉強会の一つであり、オンラインで配信される予定である。詳しくは、<https://sites.google.com/site/sekaitsunagaru/>。

Piller, I., Takahashi, K., & Watanabe, Y. (2010). The dark side of TESOL: The hidden costs of the consumption of English. *Cross-Cultural Studies*, 20, 183-201.

【フォーラム】

「ライフ」を聴いてどうするのか —言語文化研究におけるインタビューの意味—

福村真紀子（早稲田大学大学院日本語教育研究科）、遠藤ゆう子、佐藤貴仁、
佐藤正則、鄭京姫（以上、早稲田大学日本語教育研究センター）、
ロマン・パシュカ（早稲田大学大学院日本語教育研究科）

概要

研究を目的としたインタビューには様々な方法がありますが、どの形式をとるにしても、人の語りを聴く行為を、自分の研究にどう位置付けるのかを絶えず考える必要があるでしょう。私たちはなぜ人の「ライフ」を聴くのでしょうか。本フォーラムでは、複数の話題提供者がそれぞれのコーナーを設けて研究を紹介し、みなさんと意見交換をしながらインタビューの意味を再考します。ご自身の研究も含め、自由に対話してください。

キーワード

人の「ライフ」、インタビュー、人の語りを聴く意味

以下の5つの話題を用意しています。私たちも「ライフ」を語ることになりそうです。

- ①「ライフ」にまつわるインタビューを通して、私はそれが互いの心を通じ合わせる行為だと考えるようになりました。なぜなら、研究活動という形式を取っていても、聴き語るということは、人と人と向き合う行為であることに気づいたからです。【佐藤貴仁】
- ②日本語教育の実践者として<ライフ>を聴くことは、自身の日本語教育実践にとって、どのような意味があるのでしょうか。フォーラムでは、私の<ライフを聴く営み>と<私の教育実践>を結び付けるための<応答責任>について考えたいと思います。【佐藤正則】
- ③人の人生を聴く、日本語をめぐる経験—その中にある感情、気持ち、生き方—を聴く者であるからこそ、人間が人間を研究することとは何かを常に考えなければならないと思います。【鄭京姫】

④私は、子育て中の移住女性たちの「ライフ」を聴いています。彼女たちの「ライフ」は、かつて孤独な子育てによって閉塞感を抱えていた私自身の「ライフ」と重なってきました。「ライフ」を語る／聴くことは、相互作用による自己実現へのプロセスではないかと考えています。【福村真紀子】

⑤私は非母語話者日本語教師のライフを聞いていますが、なぜその人たちのライフに興味を持つようになったか、そして聴き語るという行為は自分にとってどのような意味を持っているかについて考えたいと思います。【ロマン・パシュカ】

【フォーラム】

日本語教育の「教育」を考える

日本語教育における教育言説を手がかりに

古屋憲章（早稲田大学日本語教育研究センター）、高橋聡（早稲田大学日本語教育研究センター）、松井孝浩（国際交流基金）

概要

本フォーラムでは、日本語教育において、どの時点でどのような教育観が現れたかを報告する。その上で、発表者らが自らの教育観の変遷を自身の教師歴とともに語る。更に、参加者のみなさまにも、自らの教育観の変遷を自身の教師歴とともに語っていただく。

キーワード

適応、人間形成、関係性、外国人、市民

日本語教師は、意識的にせよ、無意識的にせよ、自身の日本語教育観に基づき、日本語教育実践を行っている。例えば、私たちは、概ね「日本語教育とは、ことばによるやりとりをとおり、自己形成ができるような環境設定、および支援を行う営みである」というような教育観に基づき、教育実践を行っている。一方、「日本語教育とは、学習者に日本語に関する知識を伝達したり、技術を訓練させたりする営みである」という教育観に基づき、実践を行う教師もいる。このような教育観の異なる教師どうしが出会った場合、お互いの教育観を否定、または異物として排除しようとする可能性が高い。確かに両者の教育観には、大きな隔たりがある。しかし、いかなる教育観も突然現れたわけではない。教育観は日本語教育をめぐる歴史的・社会的文脈の中で教育言説の影響を受けつつ、必然的に現れる。私たちは、教育観の異なる教師がそれぞれの抱く教育観の歴史的・社会的位置づけを共有することにより、対立が避けられるようになるとともに、教育実践をめぐる建設的な議論が展開できるようになるのではないかと考えた。そこで、『日本語教育』1～162号に掲載された原稿に記述された教育観、すなわち、「どのような人が教育の対象者として想定されているか」、「教育実践の結果、対象者がどのように変容することが期待されているか」を記述した上で、どの時点でどのような教育観が現れているかを図示した。

フォーラムでは、上述した日本語教育における教育観発生図を参考に、私たちの教育観の変遷を自身の教師歴とともに語る。その上で、参加者のみなさまにも、自身の教育観の変遷を自身の教師歴とともに語っていただくとともに、お互いの教育観の理解を目指す。